

# 伸ばす教育

# 潰す教育

『ゆとりの教育への期待』

みつばやし けいこ

## 低学年からの時間の選択

少子化のなかで、多くの両親が子供の個性に注目して育児をしようとしている。一方、兄弟が多かった時代には、特に注意しなくても、それぞれの子供達の個性の違いが見えていたのに、兄弟姉妹が少ないと、子供の表現が個性なのか、性差なのか、時代の感化なのか、分かりにくいという面もある。また、折角、優れた個性を表現しているのに、親心で、やはり学校方針に沿った教科学習のすべての面で優れた子供を育てようという、画一的な子育てを選んでしまいがちだ。

小学校2年生になるマナの家の近くに、私立御三家へ大量に生徒を送り込んでいる名だたる進学塾がある。公立小学校が学級崩壊で正常に機能していないと悩む教員の話聞いた父親の希望で、運

試しに国立大付属の受験をしようとしたときに、一度だけ模試を受けたら、その後、頻りに塾へ通わないかと勧誘がかかった。電話攻勢が余りにも激しいので、もう一度だけ無料の学力テストなるものを受けたら、そこそこにできてしまった為、今まで以上にくり返し入塾の勧誘をされていたようだ。

本人は絵が大好きで、「今日は5人ものお友達から誘われたけど、絵がかきたかったから、断わって帰ってきてしまったの」と言うほどで、早々と区の展覧会でも特選をもらってきている。「断わっても、断わっても進学塾から電話がかかってくるのです。本人は、お友達に誘われて、出版社系の楽しい学習室へ少しだけ行って、これ以上、勉強はしたくないと言って絵ばかりかいてい

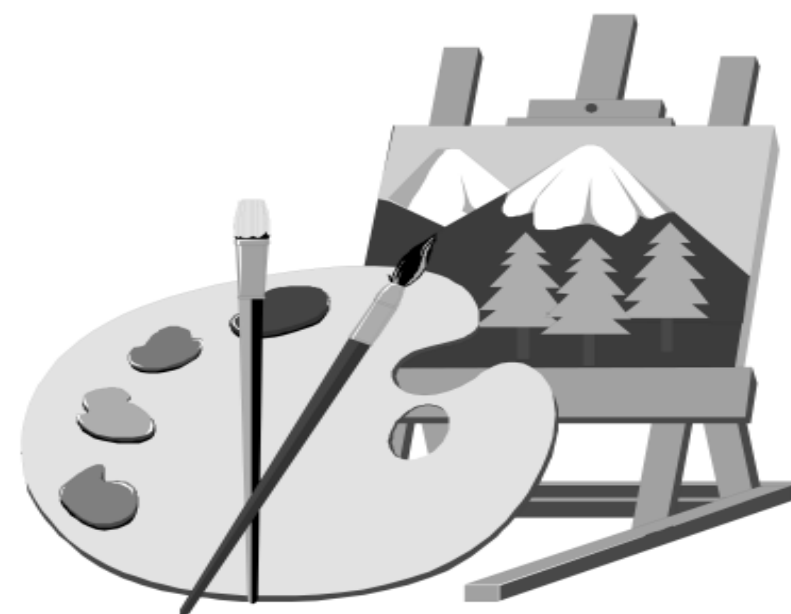
るのですが・・・」  
と、母親からの電話である。  
「本人が行きたくないなら、それがいいの  
でしょう。好きなことをする時間がなくな  
ったり、エネルギーを主要教科の学習  
ばかりで消費してしまったら、伸びるも  
のも中途半端になってしまいますから。  
それと進学塾は授業料も高いでしょう」  
「週1回で14000円だそうです」  
「1回じゃすまなくて、入れば3回は通  
わされることになるでしょうね」  
「そのようですね」  
「小学校2年生くらいでね……。行けば  
受験ランクのトップを目指して、勉強し  
ても勉強しても、もっと、もっとと言わ  
れ、大学受験まで競争させ続けることにな  
ります。少子化で、受験は確実に楽にな  
りますのにね……。そんなに絵が好きなら、  
絵の教室のほうがいいけれど、  
絵の先生選びも難しいですものね」  
「絵の先生は見当たらないのです。選び  
ますし……」

「お母さんが絵を見てあげられれば、そ  
れが一番いいことでしょう。好きなもの  
があって、熱中できるのは、今は、願っ  
てもなかなかそうは育たないようです  
から、理想的な育ち方ですよ」

## 望まれる芸術科目の多様化

私自身、好きだった絵を思いきり描か  
ないまま今にいたっている。絵くらい好  
きな時に描けばよいと思われるかもしれ  
ないが、キャンバスに向かって、色が  
思うように重ねられないとか、いつか仕  
事をやめて、もう少しもち時間が豊か  
になったらとか、と素養が足りないの  
で、広げたイーゼルをたたんでしまう。

私の場合、高等学校で普通課程をと  
り、芸術科目で音楽をとって、学外では  
合唱団の活動に明け暮れていたため、大  
切な高校3年間、好きだった絵から遠ざ  
かってしまった。大学の進路選択で、美





術が一番選みたいコースの一つだったが、デッサンの基礎すらおろそかで、到底かなわなかった。今でも、高校の芸術科目を多様に選択させる余裕のある学校は少ないが、高校段階では、芸術科目の選択を他教科と同じように複数にしたほうが、豊かで進路選択の可能性も広がるであろう。芸術科目は学校でなくてもできるが、これほどまでに決められたカリキュラムで時間を埋め尽くした教育制度の中では、隙間をぬって学校外の活動に相当なウェイトをかけることは、一般の生徒には、なかなか難しい。

特別な才能を持たなくても、ごく普通の生徒が多岐な芸術科目に造詣を深められるような教育プログラムがほしい。芸術教育を専攻する学生だけのものにして、片隅へ追いやったのは、日本の受験制度が生んだ「心の教育の軽視」であろう。

### 点数評価からの脱却

ここ数年、関西の予備校の作文の添削をグループで手伝ってきた。受験のための作文や小論文では、添削して文章を点数や記号で評価するのが通常の評価方式になっているようだが、私たちのグループは点数評価を拒否してきた。点数はつけないが、文章についての寸評を、ものを書くものの立場から心をこめて書く。書き手の心を読み、こちらの心が伝わるように、心をこめ添削者なりに最上級の文章をしたための作業は、非常に時間がかかってしまい、添削料を問題にできるような仕事ではなかった。厳しい書簡の往復で、徹夜をしても何人にも返せるものではない。

ところが、点数のないこの方式で、生徒達の文章表現力は、みるみる上達した。添削者は、作家であったり、翻訳家

であったり、コピーライターであったり、書くことを生業とする人達が主だったが、本業からいえばボランティアのようなこの仕事に、みんな惹かれて業を楽しんできた。

塾生達が、みずみずしい心のうちを精一杯に表現してくれることや、作文を通じてめざましく心が育っていくことが、手に取るように伝わってきて、添削者達の心がかげがえのない思いで満たされていた。予備校の方でも、点数をつけない添削と寸評が、生徒に高い効果があることが分かっていたから何年か続けられたのであろう。

ところが、この春、予備校の生徒数の激減を理由に、「内部で国語の先生が添削を引き受けるから」という外注打ち切りの通告が届いた。添削者達は、異口同音に子供を奪われたようにがっかりしている。

そして、「あの仕事は、予備校の国語の先生にできるものではない」と翻訳

家の添削者は言う。予備校の国語の先生もさまざまであろうけれど、高給で事務的な仕事をしている人には到底できない、誠心誠意心と心で成り立っているのが、点数で評価しない添削だと言えよう。添削者の絶大なボランティア精神にもかかわらず、この分野の仕事が経済的理由で成り立たないのは大変残念である。点数評価しない教育を学校の中でも実践してほしい。

### 中学・高校に望む芸術教育

私立高校のなかには、複数の第二外語をカリキュラムに組み込んでいたり、在校生全員が、必ず一つの弦楽器を三年間履修するという音楽教育を義務付けている情操教育の豊かな学校もある。

しかし、一般の中学・高校では芸術科目は、主要科目ではない選択科目として片隅に追いやられ、対応が手薄だ。



かつて、私の塾でも、理系志望で受験学習に通ってきた生徒が、受験の迫った夏に、突然に心境の変化で音楽大学志望に変わってしまい、腕に覚えのあるピアノで挑戦したことがあった。志望の転換をするときに、芸術科目への変更は、実技が伴うだけに、その対応のない学校に在籍すると、外部でしかるべき専門の指導者について孤軍奮闘しなければならない。

どの学校にも、総合学習として音楽実技や声楽が多様に組み込まれていて、誰もが参加できるならば、閉ざした才能を開くこともできて、進路の可能性も広げられる。学校環境に、日常的に芸術の実技をもっと普及できれば、中退者の多い学校を、どんなに楽しく豊かにできることか、はかり知れないと思う。

## 音楽療法とボランティア活動

高度経済成長の激しい競争の時代は、教育が経済社会に迎合して、追いつけ、追い越せで走らなければ生きられないと教えられた。

私自身は、そういう傾向に反論しながら、自分なりの信念を貫いて生きてしまった。数学は得意だったが、時流に乗って走ってこなかったのが、御時勢なりに経済のつじつまが合わなくなってしまった。

はた、と立ち止まって、わが身を見ると、ボランティアばかりしている。社会福祉やカウンセリングの勉強がしたくて、老いの手習いで、社会事業学校へ通ったら、ますますボランティアの仕事が多くなった。学習塾の仕事だけでも、

早朝に知的障害の人が来られたり、真夜中に、中途障害で悩みの多い卒業生が相談に来たり、遅くまで開けているので、みんなが帰ったところを見はからって難題を抱えて来る高校生がいたりする。何か常人離れの修業僧のような生活をしているのに、更に去年から観衆として巡り合った、『サクス』という精神障害者とボランティアで舞台を創る会の企画に首をつっこんでいる。

去年の公演は11月だったが、企画と舞台に参加して、精神障害の当事者の方達が、体験発表や、ロールプレイや、歌やコーラスを通して、生き生きと明るくなられる様子を見て、自分自身の心も、活動によって言いようもなく救われているのを感じた。

観衆の中の精神科医の方が、このような活動は患者さんにとって、どんな薬より良い効果がある、という感想を述べられていたが、本当にそうだと思う。

もちろん、当事者の方の感想も「よ

かった」「自分に自信が持てた」「このような活動を通して、心の病のことを初めて人に語る事ができた」と、上々であった。

参加者は、当事者もボランティアも、10代～70代まで、老若男女、舞台や音楽のプロと素人も入り交じって対等に、体験を発表し、詩を朗読し、歌を歌い、ロールプレイを演じ、ピアノやギターを弾いて、心を語る。精神の病は誰もがかかる、心の風邪のようなものと理解してほしいという願いが込められている。ここでは高校生・大学生の参加者もたくさんのかたを学びながら活動している。

私自身も、同じようなレベルを揃えたコーラスのための合唱団とか、オペレッタのためのコーラスとかを10代や20代に経験しているが、もう年齢的に責任をもって歌うことはできない、と思いこんでいたところ、ここは、音楽のための音楽ではないので、だれでもがみんな

歌っていいんだよ、ということで、安心して腹式呼吸で声が出せるので、参加することによって大いに癒されている。

人生80年の時代、やはり若いときに経験したことには、老後もずっと参加できる。ライブやカラオケもよいが、学校教育が従来型の教科路線でスリムになるうとしているならば、人材を導入して豊かな音楽教育で、全ての子供達の心を揺さぶる工夫をしてはどうかと思う。その場合も点数評価はなくしてほしい。

## 少子化の中の学校変革

今年の東京都私立高校入試では、応募者が2%、27500人も減少したと言われている。これには、2005年まで続く公立中学校の在籍生徒数の急激な減少傾向があることに加えて、私立入試が推薦入試や併願入試で、ほぼ確約される

ため、複数校受験者が減少しているという事情も伺える。

ともあれ、入学者数が募集定員に満たない学校が多く出始めている。そこで、私立校の生き残りをかけて、各学校とも、21世紀型の新しい学校への見直しが俄かに展開されている。しかし、学校説明会で聞くかぎり、ほとんどの高校が、大学入学実績を以前にもまして意識されていることが伺える。大学入試はこの先、少子化で楽になり続ける。

大学も定員割れで、いくつかはなくなる運命にあるとさえ言われる。学歴ブランドの時代はすでに終わろうとしている。今更、なぜ個々のためには役に立たない進学実績なのか、と言う気がしてならない。

学校は現象の後追いでなく、生徒達一人ひとりの個性と夢を引き出すような、豊かな心の教育構想を聞かせてほしいものだと思う。